メカジキ　南大西洋

Swordfish, *Xiphias gladius*

管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）

生物学的特性

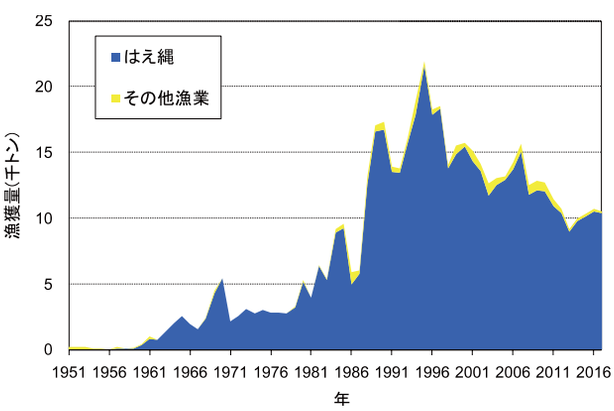
■体長・体重：下顎叉長 4.68 m・500 kg
■寿命：調査中
■成熟開始年齢：調査中
■産卵期・産卵場：熱帯～亜熱帯域
■索餌期・索餌場：アフリカ沿岸・ウルグアイ沖合水域
■食性：調査中
■捕食者：調査中

利用・用途

刺身、寿司、切り身（ステーキ）、煮付け

漁業の特徴

1980 年代末まで主に日本、台湾、韓国のはえ縄の混獲として漁獲され、漁獲量は少なかった。1989 年から本種を目的にはえ縄の浅縄操業を行うスペインの船団が参入し、漁獲量が増加した。



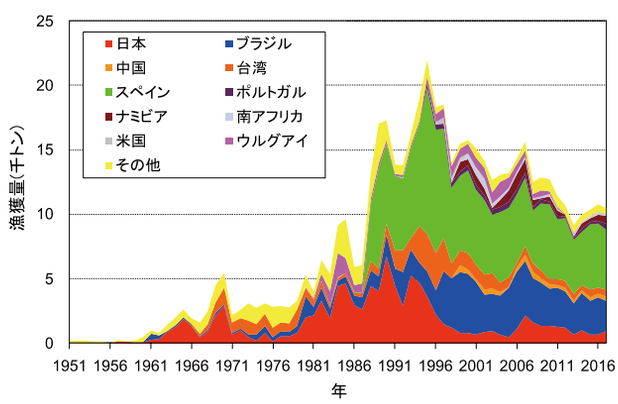
南大西洋におけるメカジキの漁法別漁獲量（1951 ～ 2017 年）

漁獲の動向

はえ縄の混獲であった 1980 年代末までは、総漁獲重量は 1 万トン未満と少なかった。本種を対象としたスペインのはえ縄船団が参入した 1989 年から漁獲量が急増し、1995 年には総漁獲量は 21,930 トンでピークとなった。1995 年以降は、規制の導入、努力量の他の大洋への移動および主対象魚種の変更により漁獲量は減少した。2017 年の総漁獲量は 10,512 トンであった。日本のはえ縄漁船は、主漁場が北大西洋に移り、努力量の減少で漁獲量も大幅に減少し、2017 年の漁獲量は 902 トンとなっている。

資源状態

最新の資源評価は 2017 年に ICCAT の科学委員会（SCRS）によって 1950 ～ 2015 年までのデータを用いて実施された。資源評価には Just Another Bayesian Biomass Assessment（JABBA）および Bayesian Surplus Production 2（BSP2）が用いられ、資源量指数と将来予測の計算には JABBA が、感度解析には BSP2 が使用された。両モデルともに資源量指数として、日本、台湾、スペイン、ブラジル、ウルグアイ、南アフリカのはえ縄の資源量指数を使用した。2 種類のモデルによる本種の資源評価結果の結果はおおむね一致していた。JABBA の結果から本種の資源状態は乱獲状態（B_{2015}/B_{MSY}=0.72）にあり、漁獲は過剰漁獲の状態（F_{2015}/F_{MSY}=0.98）ではないものの、MSY レベルに近いことが示された。また、SCRS は、JABBA を用いて 2028 年までの将来予測を行った。漁獲量を既存の TAC（15,000 トン）とした場合では、10 年後に MSY レベルに回復する可能性は 26%であり、50%の確率で資源量と漁業を MSY レベルにするためには漁獲を 14,000 トンに減少させる必要があることが示唆された。

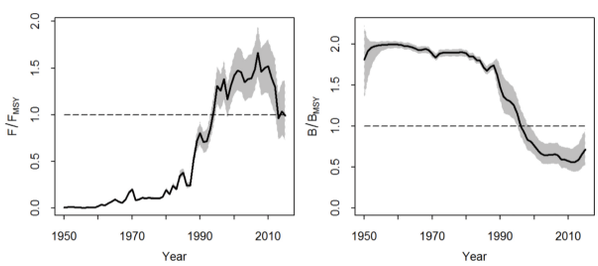


南大西洋におけるメカジキの国別漁獲量（1951 ～ 2017 年）

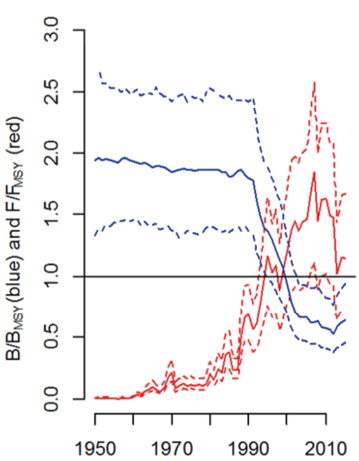
Copyright (C) 2019　水産庁　水産研究・教育機構　All Rights Reserved

管理方策

ICCAT は 2014 ～ 2017 年の間、各年 15,000 トンの TAC を設定していたが、2017 年の年次会合において、2018 ～ 2021 年までの TAC を 14,000 トンとした。日本の割当量は 901 トンである。国別割当分を超過もしくは余った場合には、2 年後の割当から差し引きまたは上乗せを行い調整することができる。ただし、調整分は前年の割当量の 20%を超えない範囲とする。
現在、大西洋全域について、①下顎叉長 125 cm ／体重 25 kg 未満の個体の水揚量を 15%以下に抑える、または②下顎叉長 119 cm ／体重 15 kg 未満の個体の水揚量を 0%にする（投棄量の評価含む）、という 2 種類の最小体長規制がある。2006 ～ 2008 年の大西洋全体で水揚げされた 125 cm 以下の個体の割合は 24%（尾数）と推定されている（北系群では 28%、南系群では 20%）。



JABBA で推定された相対資源量（B/B_{MSY}：右図）および相対漁獲係数（F/F_{MSY}：左図）
灰色は 95%信頼区間。



BSP2 で推定された相対資源量（B/B_{MSY}：青線）および相対漁獲係数（F/F_{MSY}：赤線）
実線は推定値、破線は 90%信頼区間。

メカジキ（南大西洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	低位
資源動向	増加
世界の漁獲量（最近 5 年間）	9,169 ～ 10,735 トン 最近（2017）年：10,512 トン 平均：10,142 トン （2013 ～ 2017 年）
我が国の漁獲量（最近 5 年間）	637 ～ 976[*1] トン 最近（2017）年：902 トン 平均：771 トン （2013 ～ 2017 年）
管理目標	MSY：約 14,600 トン
資源評価の方法	Just Another Bayesian Biomass Assessment（JABBA）および Bayesian Surplus Production 2（BSP2）による。
資源の状態	B_{2015}/B_{MSY}=0.72（0.53 ～ 1.01）[*2] F_{2015}/F_{MSY}=0.98（0.70 ～ 1.36）[*2]
管理措置	・2018 ～ 2021 年の TAC を各年 14,000 トン（日本の割当は 901 トン）とする。国別割当について、割当分を超過もしくは余った場合には、2 年以内であれば差し引きまたは上乗せを行い調整することができる。ただし、調整分は前年の割当量の 20%を超えない範囲とする。 ・下顎叉長 125 cm ／体重 25 kg 未満の個体の水揚量を 15%以下に抑えるか、下顎叉長 119 cm ／体重 15 kg 未満の個体の水揚量を 0%にする（投棄量の評価含む）。
最新の資源評価年	2017 年
次回の資源評価年	未定

[*1] この値は日本の近年の漁獲割当量を上回っているが、これは、ICCAT の合意に基づいた過去の漁獲割当の未消化分の漁獲が含まれているためである。
[*2] Just Another Bayesian Biomass Assessment（JABBA）の中央値と 95%信頼区間。

Copyright (C) 2019　水産庁　水産研究・教育機構　All Rights Reserved